

# 現存在の時間性へむかつて

—— カント解釈にみるハイデガーの思索の歩み ——

畠 中 和 紀

はじめに

ハイデガー<sup>(1)</sup>は『存在と時間』(GA3)のなかに、カントへの言及をすくなく残している。その言葉は、未刊に終わった第二部で示されるはずだったカント解釈の原型を、なにほどか暗示してくれる。『存在と時間』の時期にハイデガーがもっていたカント像を、講義録のなかからとりだすこと。そしてそれによって逆に、『存在と時間』へときわまっていくハイデガーの思索の歩みを明らかにすること。本稿は、この二つを目的としている。

新カント派の影響下から出発したハイデガーは、一九二五／二六年冬学期講義『論理学 真理への問ふ』(GA21.以下では、『論理学』講義と略記する)で、はじめて独自の観点から本格的に『純粹理性批判』にとりくんだ。そしてその直後、一九二六年の夏に『存在と時間』が現行のかたちで着手され、翌年に出版されている<sup>(2)</sup>。したがって本稿は、ハイデガーが『論理学』講義において提示しているカント解釈をあつかうことになる。

この講義で『純粹理性批判』を読み解くにあたって導きとなっているのは、「超越論的時間規定」である。カント

現存在の時間性へむかつて

が「図式論」でわずかに二度もちいたにすぎないこの言葉を、ハイデガーはいかに引き受けたのか。そして、この言葉を手がかりとして、いかなる問題圏がカントのなかに読みとられたのか。それを解明することから、時間とへ私は考える (Ich denke) への連関の可能性が、ハイデガーの「純粹理性批判」解釈における観点として明らかになる。そして同時に、この時間に定位したカント解釈のほうから、現存在の時間性へとむかうハイデガーの問題意識に光をあてることもできるのではないだろうか。

はじめに、「観念論論駁」に対する評価をめぐって、ハイデガーがカントからとりだそうとしている基本的な論点を提示する (第一節)。つづいて、超越論的時間規定の問題をめぐる「図式論」解釈を検討し、その射程を明らかにする (第二節)。最後に、時間とへ私は考えるへの連関の可能性へと収斂していく「演繹論」解釈を追い、それをハイデガーの問題意識からとらえなおす。そこではじめて、ハイデガーが認めたカントの限界とそれを超えゆくハイデガーの自覚的な歩みとが、描きだされるはずなのである (第三節)。

## 第一節 「観念論論駁」再考

『存在と時間』のなかで、ハイデガーはカントを評してこういつている。

「テンポリリテートという次元へとむかつて探求の道を一步踏みだした……最初にして唯一の人は、カントである。」 (GA2, 31)

ハイデガーが『存在と時間』において問うたのは、いうまでもなく存在への問いである。存在への問いにおいて、問われているもの (Gefragte) は存在であり、問い求められているもの (Erfragte) は存在の意味である (vgl. GA2, 6)。つまり、存在をその意味を問うというかたちで問題にする、というわけである。そしてハイデガーの構想によれば、「存在の意味への問いに対する具体的な答えは、テンポラリテートの問題圏の究明のうちではじめて与えられる」(GA2, 26) はずだった。それゆえに、「テンポラリテートという次元へとむかつて探求の道を一步踏みだした最初にして唯一の人」としてのカントが、ハイデガーにとつて最初の道しるべとなる。実際に、テンポラリテートの問題圏を導きとして存在論の歴史を現象学的に解体するところみである『存在と時間』第二部は、カントの解釈ではじめられるはずだった (vgl. GA2, 27 ff., 53)。

しかし、ハイデガーがカントをこう評価するとき、その内実はどうなっているだろうか。つまり、ハイデガーはカントのうちになにを見てとつていたのだろうか。それを明らかにすることから、はじめることにしよう。

『存在と時間』の既刊部でハイデガーがまとめたかたちでとりあげているのは、『純粹理性批判』<sup>(3)</sup>の「觀念論論駁」と題された章である。この章は、第一版で「第四誤謬推論」としてあつかわれていた問題が、「本当の意味での増補」(BXXXIX, Anm.) とともに「原則論」に組みこまれたものである。そこでカントがあらたに証明しようとしているのは、「私自身が現実存在しているという、単なるしかし経験的に規定された意識は、私の外なる空間中に諸対象が現実存在していることを証明する」(B215) という定理である。この定理を証明するために、経験的に規定された私の意識が外的対象の存在によって可能になることが示される。外的対象は私の意識の可能性の条件であるから、それが存在しないということはありえないのである。したがって一般には、伝統的な觀念論<sup>(4)</sup>に対して自分の超越論的觀念論をきわだたせようとして、カントは外的対象の存在を強く主張していることになる。

現存在の時間性へむかって

この部分を、ハイデガーは特異な観点から読もうとする。ハイデガーは実在性をあつかう節 (GA2, 286 ff.) でカントの証明を検討しているが、その検討は証明の過程そのものや証明の成否にかかわるのではなくて、むしろカントが証明において前提しているものへとむかうのである。

カントは、外界の存在が証明されていないことを「哲学および一般的人間理性のスキャンダル」(B XXXIX, Ann.)とみなして、それを証明しようとしている。そのさい、デカルトの立場を克服すべく、内的経験が外的経験によって可能になることが論証される。しかしそうだとすれば、カントは「私の内」と「私の外」との区別と連関を前提しているのであって、そのときデカルトの立場はむしろ受け入れられているのである。この前提を存在論的に突きつめていけば、現存在の世界内存在があらわになり、外的世界の証明は不要であることが明らかになるはず<sup>(5)</sup>に。ハイデガーはおよそこう認定している (vgl. GA2, 271)。

同様の論述は、すでに『論理学』講義のうちにもあらわれている (vgl. GA21, 292 ff.)。しかしハイデガーは、『論理学』講義の重要な箇所——「第一類推」の分析から「図式論」へとさかのぼる直前——で、別の角度から「觀念論論駁」にふたたび言及している。「觀念論論駁」についてハイデガーがいうところを理解するのに必要な範囲にかぎって、「第一類推」の解釈をてみじかに検討しておこう。

第二版の原則によれば、「諸現象のあらゆる変化にさいして実体は持続する、そして実体の量は自然において増えることも減ることもない」(B 324)。第二版で付けくわえられた証明は、およそ次のような筋道をたどっている<sup>(6)</sup>。現象のあらゆる変化は、変化せずにとどまる時間のうちにある。ところで、時間そのものは知覚されえないのであるから、現象のうちに持続的な基体があつて、それが一方では時間一般を表象し、他方ではそれへの関係によって現象の変化が知覚されるのでなければならぬ。この基体は実体であり、実体は現象のあらゆる変化をつうじて同一

のままにとどまるので、その自然における量は増減しない。

この証明に深入りすることは、さしあたり必要ではない。ここではむしろ、ハイデガーの解釈の焦点だけをとりだしたのである。それは、客観的な時間規定の問題にかかわっている。<sup>(7)</sup>

与えられている多様なものに対して、私が単に受動的にのみかかわるとしたら、移り変わっていく多様なものが時間の相においてあらわれることはないだろう。つまり、多様なものはその場かぎりの印象にすぎず、私の経験を構成する要素とはなりえない。それに対して、私が今をとらえようとすればどうだろうか。その今において、私は私のまえにあるものをもつ。今をとらえようとするたびに、私はそのつどあるものにかかわるのである。そのさい、あの今とこの今との区別は、私がそのつどかわっているものにもとづいている。つまり今とは、「なにかがそこにある今、なにかが起る今なのである」(GA21, 349)。

しかしながらこれだけでは、あの今とこの今とが客観的な時間の流れのうえに位置づけられることにはならない。あの今とこの今とが区別されることと、両者が客観的な先後関係あるいは同時性において規定されることは、当然ながらまったく別のことである。時間規定が客観的であるためには、私が今においてかわるものが同一の持続的なものとの関係にある、ということが付けくわえられなければならない。逆に言えば、いかなる時間規定も現象の変化にもとづいているのであるが、その変化がある同じものの変化でないとすれば、時間規定は客観的とはならないのである。

ここで「第一類推」は、時間規定の客観性という観点から現象における実体を導く原則としてとらえられている。ハイデガーの言葉を引けば、この原則は「自然一般の客観的に規定可能な時間内存在に対する可能性の条件を言いあらわしている」(GA21, 335)のである。持続的なものとの関係のうちではじめて、私はあの今この今において客

観的な時間規定を受ける。つまり、私が客観的な時間のうちで経験を構成するということは、すでに持続的な実体を前提しているのである。この論点が「観念論論駁」のなかでいかに機能しているのかを、ハイデガーは明らかにしようとしている。

周知のようにカントは、第二版の序文に「観念論論駁」についての長い注を付している。そのなかでカントは、「私が時間のうちに現実に存在していることを私が内的経験によって意識すること」と「単に私の表象が意識されること」とを区別している (BXXXIX f, Anm.)。ハイデガーはこの区別に直接には言及していないが、さきに論じた時間規定の客観性という観点と重ねあわせて考えることができる。定理において「私の外なる空間中に諸対象が現実に存在していることを証明する」とされているのは、「私自身が現実に存在しているという、単なるしかし経験的に規定された意識」である。これは「単に私の表象が意識されることより以上」(BXL, Anm.) のことである。つまりカントは、単なる私の意識というものは外的対象の存在を証明しはしない、と考えているのである。

それでは、「より以上」ということでなにが考えられているのだろうか。ハイデガーは、一貫して時間規定の問題として読もうとする。「私は私が時間のうちに規定されたものとして現実に存在していることを意識している」(B276) ということが、カントの出発点である。つまり、時間規定が付けくわえられなければならない。私が時間的に規定されることが持続的なものを前提していることは、「第一類推」にふれたさいにすでに見た。そして、その持続的なものに依拠してはじめて私が時間的に規定されるのであるから、そのものは私の外にあるのではなくてはならない。「経験的に与えられた現存在は、それ自身において、……持続的なもの、物の世界、つまりもつとも広い意味での自然を前提している」(GA21, 356) である。こうして外的世界の存在は、私が時間的に規定されているということから、導かれたことになる。

ハイデガーは『論理学』講義において、「第一類推」をあつかう節の最後三頁たらず (GA21, 335-7) を「観念論論駁」にあてている。この短い箇所のことあらためて注目したのは、カントをデカルトとならべて糾弾する一方で、ハイデガーがそれとは別の角度から「観念論論駁」に見られるカントの思考を汲みとろうとしていることを示したかったからである。ハイデガー自身、「別の連関においてなおこれらの説明（『観念論論駁』と第二版序文の注）に立ち戻らなければならない」（GA21, 293）と述べているとおりである。その立ち戻りの場所こそ、ここなのである。

「観念論論駁」において「議論は時間という現象に導かれている」（ibid.）。ハイデガーは、カントが私の意識から世界の存在を証明するにさいして、時間へのまなざしが決定的な役割を演じていることを見てとったのである。まさにこの点にこそ、ハイデガーが「観念論論駁」の議論を「カントがテンポラリテートの問題圏へともっとも広く踏みこんだ場所」（ibid.）として評価しなおすことができた理由がある。この評価は、本節の冒頭に引いた『存在と時間』の言葉に対応している。<sup>(9)</sup>「テンポラリテートという次元へとむかつて探求の道を一步踏みだした最初にして唯一の人は、カントなのである」。

## 第二節 超越論的時間規定の問題

「観念論論駁」の解釈をめぐって、ハイデガーがカントのなかに読みとっていた基本的な論点は明らかに became ところと思う。私が時間的に規定されているということ、言いかえれば時間と私とのかかわりが、カントの証明においてはつきりと機能しているのである。しかしそこでは、この時間と私とのかかわりは証明の出発点に位置していた。つまり、それがいかなるのかかわりであるのかは、解明されていないのである。

現存在の時間性へむかって

この問題に対するカントのアプローチを、ハイデガーは「図式論」のなかに見ている。そして、「超越論的時間規定」をカントの可能性としてとりだそうとしている。それゆえに私たちはハイデガーの「図式論」解釈にむかうが、さしあたってカントの言葉で「図式論」の問題設定を定式化しておこう。

一般に対象を概念のもとに包摂するさいには、「対象の表象と概念とが同種的でなければならぬ」(B176)。ところが「純粋な悟性概念は経験的な直観とくらべてまったく別種のものであつて、なんらの直観においてもけつて見いだされえない」(ibid.)。それゆえに、「いかにして純粋な悟性概念が現象一般に適用されるのか、その可能性を示すこと」(B177)が求められる。カントが「図式論」で問題にしていたのは、このことにほかならない。

カントの議論は、カテゴリーと現象とが直接に結びつけられない以上、両者のあいだを媒介する「第三のもの」(ibid.)を要求することになる。しかもそれは、カテゴリーと現象とを結びつけるのであるから、一方でカテゴリーと同種であると同時に他方で現象と同種でなければならぬ。そうした媒介は、何によってなされるのか。こう問うさい、問題となつてゐるのはカテゴリーの現象への適用可能性であるから、媒介はカテゴリーがいかに感性化されるかという方向で考えられることになる。カテゴリーを感性化して現象と結びつける「第三のもの」、それが超越論的図式なのである。

カテゴリーの感性化を可能にするものはないか。あるいは、ハイデガーの言葉でいえば「アприオリな概念はアприオリに感性化されるのでなければならぬ」(GA21, 376)が、それはいかにしておこなわれるのか。時間によつて、とハイデガーは答えようとする。その過程を追うまえに、「超越論的感性論」を経由することにしよう。というのも、ハイデガーは「感性論」解釈のなかで、時間へとむかうカントのまなざしをくつきりと描きだしているからである。



空間と時間の概念を形而上学のおよび超越論的に究明するさい、カントは空間を外的感官の形式として、時間を内的感官の形式として提示する。カントの基本的な立場からすれば、外的現象は外的感官の形式である空間の規定に服するのであって、それゆえに「時間はけつして外的現象の規定ではありえない」(B 49)。しかし同時に、内的感官の形式としての時間について、カントはつぎのようにいつてもいる。「時間はあらゆる現象一般のアプリオリな形式的条件である」(B 50)。こうなると、時間と空間との関係は一義的にはさだまらない。むしろ、内的感官と外的感官とのあいだには、二重の關係があるようにみえるのである。

時間はさしあたつては内的感官の形式であつて、そのかぎりでは外的感官の形式である空間と並置される。しかし、外的感官の表象は、「心の規定」(B 50)「心の変様」(A 39)として内的感官に属する。そのように内的感官において私たちに与えられるかぎりでは、外的感官の表象は内的感官の形式——つまりは時間——に規定されることになる。こうして、空間に対する時間のある種の優位が導かれることになる。「時間はあらゆる現象一般のアプリオリな条件である、つまり、内的な現象の直接的な条件であり、まさしくそのことによつて間接的に外的な現象の条件でもある」(B 50)。

こうしたカントの思考に対して、ハイデガーはこれがまさに「導出」(GA21, 335)であることを指摘する。そして導出の手順を、カントにおける表象概念の二義性<sup>10)</sup>から説明する。つまり、カントは表象 (Vorstellung) という概念を二重の意味でもちいている。表象すること (Vorstellen) とつて、そして表象されるもの (Vorgestelltes) として。「カントは表象することが時間のうちにあることから表象されるものが時間のうちにあることへと推論している」(GA21, 336) のである。

時間の普遍性を導くこの推論の妥当性は、それ自体問題となりうる。<sup>11)</sup>そして、内的感官と外的感官との二重の関

係についてのハイデガーのこうした理解も、唯一絶対のものではありえない<sup>(12)</sup>。しかしここで強調すべきは、推論のもつ問題点にもかかわらず、カントが内的現象を越えて外的現象にまで時間の規定をおよぼそうとしている、ということである。ハイデガーは、カントの思考の筋道を整理しながら、この論点へと導いていくのである。それでは、カントが不適切な推論をおこなってまで時間を「あらゆる現象一般のアプリオリな条件」として提示しようとする、その理由はなんだろうか。「外的現象がまさに時間的に規定されているという自然な経験」(ibid.)を、カントが正しくまなざしているからなのである。

こうして時間をあらゆる現象のアプリオリな条件としてとりだすことができれば、「図式論」の問題——カテゴリーの感性化を可能にするものはなにか——に答える準備がととのったことになる。超越論的図式は、あらゆる現象に対してカテゴリーが適用される条件をふくまなければならない。ところで、あらゆる現象にはそのアプリオリな形式として時間が、そして時間のみがふくまれている。したがって、時間とのかかわりにおいて感性化されたときのみ、カテゴリーはあらゆる現象に妥当することになる。カテゴリーと時間との結びつきこそが、超越論的図式として機能するのである<sup>(13)</sup>。それをカントは、「超越論的時間規定」(B 178)とよぶ。

超越論的時間規定についての言葉が、『存在と時間』のなかに残されていた。

「カントの時間分析は、時間の現象を主観のうちに取り戻したにもかかわらず、伝承されてきた通俗的な時間了解へと方向づけられたままであり、このことが最終的にカントを妨げて、『超越論的時間規定』という現象をその固有な構造と機能において明らかにさせなかった。」(GA2, 32)

この言葉は、超越論的時間規定という現象がカントにおいてじゅうぶんにはとらえられなかったことを、まずは文字どおり主張している。しかしそれと同時に、ハイデガーがこの現象をカントを超えて展開する可能性を示唆している。その内実を明らかにしなければならない。

ハイデガーは、『存在と時間』において存在の意味を問うた。『存在と時間』の定式によれば、「意味とは、先持、先観および先概念によって構造化された企投の向かうところ (Woräufhin) であり、そこからして (aus dem her) あるものがあるものとして了解されるのである」(GA2, 201)。したがって存在の意味とは、存在がそれへのまなざしにおいて了解されている、そのものである。つまり存在の意味を問うことは、存在はどこから了解されるのか、と問うことなのである。この問いに時間からと答える、それがハイデガーの基本的な発想である。

この発想は『論理字』講義のなかですでに、「存在は現前性 (Anwesenheit) を意味する。真理は『現在』を意味する。現前性は現在から了解される。現在<sup>1)</sup>は時間の様態の一つである」(GA21, 205) と言いあらわされていた。つまり、「存在を現前性として現在から了解することは、存在を時間から了解することなのである」(GA21, 193)。アリストテレス<sup>2)</sup>解釈に由来するこうした見通しのなかではじめて、カントが超越論的時間規定とよんだものへの注目が生まれた。「存在および存在性格を了解することと時間との関連についてなにごとかを予感した唯一の人」(GA21, 194)として、カントがハイデガーのまなざしに入ってくる。図式論における時間の機能を中心にすえて『純粹理性批判』を時間的に読み解く、という観点の成立自体、『存在と時間』へとむかう歩みのなかではじめて可能となったのである。超越論的時間規定の可能性は、こうした背景のもとで評価されなければならない。

超越論的時間規定は、超越論的図式であった。カテゴリーが感性化されて現象へと適用されるための可能性の条件として、時間はカテゴリーと結びついている。したがって時間は、カントにとってはあらゆる認識の根幹に位置

している。一九二七／二八年冬学期講義『カントの「純粹理性批判」の現象学的解釈』（GA25）の言葉を借りれば、カントが示したのは「悟性は悟性であるかぎり、本質的に時間に関係づけられたものとしてしか機能しえない」（GA25, 430）ということにほかならない。

第一節で見たように、ハイデガーはカントが「第一類推」および「観念論論駁」で客観的な時間規定の問題にかかわっていると考えていた。客観的な時間規定が外的世界の存在によって可能になるというその論証のなかで、時間と私とのかわりがもちいられていた。このかわりの具体的な姿を、ハイデガーは「図式論」のなかに求める。客観的な経験を構成するための不可欠の契機として、時間はカテゴリーと結びついている。この時間と私とのかわりが、超越論的時間規定という名のもとにとりだされたのである。カントは「時間を単に主観に割り当てているだけではなく、さらにそのうえに、時間の現象を認識の解釈のために根底にすえている」（GA21, 404）。それゆえにハイデガーは、超越論的時間規定にカントの可能性を見るのである。

カントをこう評価したうえで、なお残される問いがある。それは、超越論的時間規定はいかにして可能となるのか、という問いである。問題は、時間とへ私は考えるとの連関にかかわっている。ハイデガーは、ここからカントを超えていくことになる。しかしその道は、なおカントによって途中まで歩まれていた。「演繹論」が、その舞台となる。

### 第三節 時間現象の取り戻し

『論理学』講義を手がかりとして、「観念論論駁」および「図式論」についての解釈をたどることで、私たちはハ

イデガーのカント解釈の核心に導かれてきた。問題は、超越論的時間規定の可能性にかかわっている。それは言いかえれば、時間と「私は考える」との連関を問うことにほかならない。カントにおいては、この問題はこうなっていたのだろうか。ハイデガーは、『存在と時間』でこう断定していた。

「伝統がこのように二重に影響しているため、時間と「私は考える」とのあいだの決定的な連関はまったくの暗がりにつつまれたままである、両者の連関は問題にすらなっていないのである。」(GA2, 32)

これまでのところで見えてきたように、カントは「観念論論駁」のなかで、時間と私とのかわりをもちいていた。さらに「図式論」では、それが超越論的時間規定としてとりだされていた。時間はカテゴリーと結びついて、あらゆる認識の根底ではたらいっているのである。そうだとすれば、カントが時間と「私は考える」との連関を見ていたことはまちがいない。それにもかかわらずハイデガーが「両者の連関は問題にすらなっていない」というのは、なぜなのだろうか。カントにおいては、時間と「私は考える」との連関は「演繹論」の問題圏に属する。「演繹論」の課題を確認することからはじめることにしよう。

『純粹理性批判』において問われたのは、いうまでもなく「アприオリな総合判断はいかにして可能となるのか」(B19)という問題であった。カントはアприオリな総合判断を可能にするものを求めて、まずは感性のうちにアприオリな直観の形式(空間と時間)がなければならないことを示した。つづいて、悟性のうちにアприオリな概念が存在することが形而上学的に演繹される。これによって、受容性の能力としての感性によって対象が与えられ、それが自発性の能力としての悟性によって思惟される、という枠組みができていく。しかしそのさい、「思惟の主観的

現存在の時間性へむかって

な条件がいかにして客観的な妥当性をもつのか、つまりあらゆる対象認識の可能性の条件となるのか」(B122)という問題が残される。これに答えることが、「カテゴリーの超越論的演繹」<sup>10</sup>の課題である。

カントは基本的に、直観において与えられる多様なものが必然的にカテゴリーにしたがうことを示す(B143)ことで、この課題を解決しようとしている。カテゴリーにしたがってのみ多様なものが統一されるがゆえに、カテゴリーは客観的に妥当するのである。この論証のさいに鍵になるのが、 $\langle$ 私は考える (Ich denke) $\rangle$ である。

「 $\langle$ 私は考える $\rangle$ があらゆる私の表象にとまないのでなければならぬ」(B132I)、とカントはいう。私の表象が私の表象であるかぎり、そこには私は考える $\langle$ がともなう可能性が存立していなければならぬ。ハイデガーの言葉でとらえなおせば、「あらゆる直観ないしは直観されうるはずのものは、可能な $\langle$ 私は考える $\rangle$ へと必然的に関係づけられている」(GA21, 323)。したがって、「諸表象の私への帰属性は、可能な $\langle$ 私は考える $\rangle$ にもとづいている」(ibid.)のである。そして諸表象は、一つのおなじ意識へと結合されることによって、総合されることになる。統覚の統一にもとづいてのみ、直観における多様なものの統一が可能となるのである。そのさい、多様なものを統覚の統一のもとにとりまとめるのは、判断の論理的機能にはかならない。それゆえに、多様なものは必然的に、判断の論理的機能にもとづくカテゴリーにしたがうのである。

ここで、「図式論」解釈からえた成果に照らして、ハイデガーの問題意識を明確に規定しておこう。統覚の統一にもとづいてカテゴリーのもとに多様なものが統一されるという事態は、超越論的時間規定によって可能となる。それは、カテゴリーと時間との結びつきにはかならない。時間と結びつくことによつてはじめて、カテゴリーはあらゆる現象に適用されるための条件をみずからのうちにふくむことになる。カテゴリーは本質的に時間とのかかわりうちにあるのであって、そうでなければ対象認識を可能にする条件としては機能しえないのである。

カテゴリーとかかわることによって、時間は認識の根幹に入りこんでくることになる。ここではじめて、時間と「私は考える」との連関が問題となる。ハイデガーが「演繹論」のうちに読みとっていた「根本問題は、時間と「私は考える」との連関とこの連関の可能性へとむかっている」(GA21, 326)のである。カントにとって「演繹論」は、思惟の主観的条件にすぎないカテゴリーが客観的に現象に妥当する、その理由を明らかにする場であった。しかしハイデガーは、「演繹論」のなかに超越論的時間規定の可能性の根拠を求めようとしているのである。時間と「私は考える」との関係はどうなっているのか。あるいはむしろ、両者の連関はいかにして可能となっているのか。これがハイデガーのカント解釈にとつての決定的な問題である。

『存在と時間』の問いが存在の意味への問いであり、その問いにハイデガーが時間でもって答えようとしていたことは、さきに見たとおりである。そのさい、存在と時間とを媒介するものとして、ハイデガーは現存在を考えていた。一方で、「存在がある (es gibt Sein) のは、現存在が、つまり存在了解のオンティッシュな可能性が存在するかぎりにおいてである」(GA2, 281)。そして他方で、「現存在の存在の意味として、時間性 (Zeitlichkeit) が提示される」(GA2, 24)。現存在によって媒介されてはじめて、存在と時間が結びつけられ、存在一般の意味への問いが時間によって答えられることになるのである。そのさい、「現存在の存在の意味は時間性である」というテーゼが生命線となっていることは、容易に見てとられよう。ハイデガーが「演繹論」のうちに見ている根本問題は、存在の意味への問いにおけるこの問題意識のなかで読み解かれなければならない。

時間と「私は考える」との連関について、カントは両者の近さを認めている。両者について表象の相関者 (Korrelatum) というおなじ規定を与えていることからも、それは明らかである。「悟性による内的感官の触発」という作用が、この近さの根拠をなしている。カントによれば、「内的感官は私たち自身をも、私たちが私たちに現れるよ

うにのみ意識するのであって、私たちが私たち自身においてあるように意識するのではない。それというのも、私たちは私たちを、いわば内的に触発されるように直観するのみであるから」(B 152c)。したがって、内的感官は「受動的直観」であって、「直観における多様なものを結合することではなく、それゆえに規定された直観をなんらふくまない」(B 154)。この受動的直観にはたらきかけ、これを規定するのは、自発的な悟性である。「悟性が内的感官を触発することによって、多様なものの結合を生みだす」(B 155)のであり、内的感官の規定は現象として時間のうちに秩序づけられるのである (vgl. B 156)。

しかしここでは、受容性と自発性がなお区別されているのではないか。それゆえに感性と悟性との結びつきの根拠は、つまりは超越論的時間規定の可能性は、なお与えられていないのではないか。この疑問が、本節の冒頭に引いた『存在と時間』の言葉の意味である。カントはたしかに時間と「私は考える」との連関を見ていたが、しかしこの連関の可能性の根拠を明確に提示してはいない、とハイデガーは考えているのである。悟性による内的感官の触発、つまり主観のいわば自己触発は、時間と「私は考える」とのあいだの間隙を埋めてはいない。現存在を時間性としてとらえるという独自の問題意識<sup>18</sup>からカントのうちに読みこんだこの限界を、ハイデガーはいかにして超えていこうとするのか。その方向を示唆して、本稿を終えることにしよう。

「感性論」を解釈する部分において、「感官の多様性が出会われてくることのうちには、なにかへとまなざしをむけることが存している」(GA21, 274)とむわれていた。そして、そのまなざしをむけることのどこへ (Worauf) として時間が解釈されたのであった (vgl. GA21, 275 f.)。それがいまや、……へとまなざしをむけることは、根源的な自己触発<sup>19</sup>としてとらえなおされるのである。時間がみずからを触発してみずからへとかわらせる。「時間は純粹なまなざしをむけることである。——時間はまなざしをむけることのふたへ (Worauf) そのものである」(GA21,



345)。

時間をこう解釈することによって、時間と「私は考える」の関係は同一性において言いあらわされうるようになる。つまり、「私は考える」は、時間のうちにあるのではない、そうではなくて時間そのもののなのである」(GA21, 405)。この事態が、超越論的時間規定の可能性にはじめて根拠を与える。「私は考える」の根源的に時間的な性格を見てとることは、しかし同時に、時間の現象そのものを取り戻すことにほかならない。「存在と時間」への歩みのなかではじめて、カントの時間論への着目が可能になった。そして逆に、『純粹理性批判』を時間的に読み解くことで、ハイデガーは『存在と時間』の枠組みを可能にする時間現象を取り戻したのである。

ハイデガーは、『演繹論』におけるカントの自己触発と自分のそれとが別のものであることを、はっきりと自覚していた(vgl. GA21, 341)。そこに見てとられるべきは、「本質的にカントを超えていく解釈」(GA21, 406)なのである。カントの可能性としてとりだされた超越論的時間規定は、時間と「私は考える」の連関の問題へと問い深められた。現存在の時間性という観点から『純粹理性批判』のなかに読みとられたこの問題圏をめぐって、ハイデガーはカントを超えていく。そのあらたな一歩は、現存在の存在の意味は時間性であるという『存在と時間』のテーゼへと明確に視線をむけて、踏みだされたのである。

『存在と時間』の出版後、一九二七年の夏学期におこなわれた『現象学の根本問題』講義において、ハイデガーは出版を見あわせた『存在と時間』第一部第三編のあらたな仕上げ」(GA24, 1)をこころみる。そのなかではじめてテンポラリテートの問題が掘りさげられ、それとともに現存在の超越という事態が分析される。そうした成果からさらにカントが読みなおされ、『カントと形而上学の問題』へと結実していくのであるが、その過程を明らかにすることは他日の課題となる。

現存在の時間性へむかって

注

(1) 本稿では、ハイデガーの著作へ指示するさいは、Gesamtausgabeの略号としてGAを用い、巻数と頁数を記して当該箇所を示す。

(2) 「存在と時間」の書き換えについては、細川亮一「ハイデガー哲学の射程」(創文社、二〇〇〇年)、第三節参照。「存在と時間」の書き換えは形而上学をめぐる体系構想の変容から初めて理解できる」(同書、二八頁)として、アリストテレス解釈に動因を求める氏の解釈は説得的である。それに対して本稿は、「存在と時間」へのハイデガーの思索の歩みを、カント解釈にかかわるかぎりで明らかにしようとしている。

(3) カントの「純粹理性批判」へ指示するさいは、第一版をA、第二版をBとして、頁数を示す。

(4) カントは、バークリーの独断的な観念論については「感性論」の範囲内で論駁できると考えていた(Vgl. B 274)。第二版でほどこされた「観念論駁」の増補は、デカルト流の蓋然的な観念論を論駁するためである。「デカルトにおいては疑いえないものであった私たちの内的経験ですら、外的経験を前提することのみ可能となること」(B 276)を、カントは示そうとしているのである。

(5) ハイデガーはここに、カントにおける「主観の主観性についての先行的な存在論的分析の欠如」(GA2, 32)を指摘している。

(6) ハイデガーの後年のカント講義「物への問い」を参照した。Vgl. GA41, 235 f.

(7) この点の理解については、ハイデガーとはまったく別の角度からのアプローチながら、ストローソンの整理が有益であった。Cf. P.F. Strawson, *The Bounds of Sense*, London, 1966, p. 132.

(8) 「論理学」講義に先立つ一九二五年夏学期講義「時間概念の歴史への序説」(GA20)ですでに、「存在と時間」のデカルト解釈はほぼできあがっている。しかしこの講義では、カントについての本節でとりだしたような積極的な論点はまだ提示されていない。

(9) テンポラリテートは、「論理学」講義ではじめて述語化された。しかしこの言葉は、「論理学」講義ではまだ明確に意味づけされておらず、「存在と時間」におけるのとおなじ水準でもちいられていると言いたい点もある。たとえば、細川亮一「意味・真理・場所」(創文社、一九九二年)、一四四頁参照。

- (10) 表象概念の二義性については、『講座ドイツ観念論第二巻 カント哲学の現代性』（弘文堂、一九九〇年）所収の大橋容一郎「表象概念の多義性」参照。『表象』概念の多義的な使用からは、能力をあらわすものとしての表象と、与件をあらわすものとしての表象という二者が抽出され、それらの関係はどのようなものなのか、という問題が生じてくることになる」（同書、九八頁）。
- (11) ハイデガー自身は、「時間の普遍性についてのカントの証明は、その動機、前提、論立ての点で支持できない」（GA21, 337）としている。
- (12) たとえば中島義道「カントの時間構成の理論」（理想社、一九八七年）では、「自己意識」と「自己認識」の区別にもとづく説明が採用されている。同書、五四頁参照。
- (13) 時間によるカテゴリーの感性化の問題は、のちに「カントと形而上学の問題」（GA3）において超越の問題としてとらえなおされることになる。「この図式性はマプリーオリに超越を構成するのであり、そのゆえに『超越論的図式性』とよばれるのである」（GA3, 105）。
- (14) 限定していえば、『形而上学』第九巻第一〇章の解釈。Vgl. GA21, 170 ff. 細川「意味・真理・場所」八〇頁以下、一四〇頁以下参照。
- (15) 伝統の二重の影響ということと考えられているのは、デカルトの立場の引き受けと、伝承されてきた通俗的な時間了解への定位である。前者については、第一節ですこしくふれておいた。時間の問題については、カントを超えようとするハイデガーの歩みを明らかにすることが、本節の課題となる。
- (16) 『論理学』講義であつかわれているのは、第二版の演繹論である。のちにハイデガーは第一版に定位することになる（GA3, GA25）が、これには構想力に対する評価がかかわっている。Cf. D.O. Dahlstrom, "Heidegger's Kant-Courses at Marburg", in *Reading Heidegger from the Start*, State University of New York Press, 1994, p. 295.
- (17) Vgl. B 226, A 123.
- (18) 一九二二年の「ナトルフ報告」ですでに「人間的現存在の特殊な『時間性』」が語られてくる（"Phänomenologische Interpretationen zu Aristoteles (Anzeige der hermeneutischen Situation)", in: *Diöney-Jahrbuch*, Bd. 6, S. 244）。しかし、現存在の時間性が存在の意味への問いのうちに明確に位置づけられるのは、『時間概念の歴史への序説』講義をまたなければならぬ。
- (19) 自己触発としての時間については、細川「意味・真理・場所」一四二頁以下参照。そして cf. Th. Kiesel, *The Genesis of*

現存在の時間性へむかって

*Heidegger's Being and Time*, University of California Press, 1993, pp. 414 ff.

(おたなか かずのり・東北大学大学院文学研究科学生)